



創作実験劇場 ご来会心よりお待ちしております

2010年3月13日(土)6時開演 東灘区民センターうはらホール

出演 寺井美津子 金沢景子 菊本千永 かじのり子 向井華奈子 石井麻子 板垣祐三子 安田蓮美 萩原陽子 仲間くみ子
平岡愛理 西田梨緒 谷岡亮 松本佳那子 古川光咲 田邊さつき 谷岡このみ 西田比奈 菊原麻衣花 上田理央
雲井綾音 三木涼音 木村はな 菊原麻理奈 渡辺菜子 西尾咲里 藤井花名 雲井瑞帆 西村文伽 坂本のより 大井遥
出品 藤田佳代 寺井美津子 金沢景子 菊本千永 かじのり子 向井華奈子 谷岡亮

実験劇場も15回目になりました。勢いだけで、でも何の疑いもなく創り始めた頃から考えると、創るということにもう少し慣れてもよさそうなものなのに、いつでも創作するのは簡単ではありません。今回も、苦労を重ねてようやくお見せすることのできる作品が仕上がりました。作舞者たちの作品コメントです。どうぞお読み下さい。そして、どうぞ観に来て下さい。

夢と知りせば 金沢景子

この創作実験劇場のテーマは「歌う」ですが、和泉式部の歌「さめてこそみるべかりけれうつつにもあととはかき夢と知りせば」をもとにオムニバス3作を創りました。1、夢追人・・・理想の未来を実現させたいと思っている人たちはただひたすら今を懸命に生きてる人か？ 2、まどろむ猫・・・ただ今にいる？夢を見るのかな？(ダンサーは小3、4年生5人です。発表会とは違う意気込みで張り切って踊ってもらいます。) 3、歌う花・・・人が長年夢見て作り上げた青いバラはどんな気持ち？ ついつい未来志向になって不安になったりする私ですが、あるのは今だけ。しっかり今ここにしようと思うこの頃です。

Grab it! つかまえろー かじのり子

この題名は、同名の曲からもらいました。itとは・・・何かです。踊りの中で、私はつかまえた手の中を見てしまい、それは離れていってしまいます。佳代先生はいつも言います。「つかまえたなら、それを信じて見ないこと。」と。毎日、リハーサルを重ねております。ぜひぜひご来場くださいませ。今回はCDを使用していますが、11月23日に開催させていただく かじのりサイトではサクソフォン奏者 西本淳さんの演奏で踊ります。

歌わない鳥 寺井美津子

題名に惹かれて呼んだ「沈黙の春」。ご存じの方も多いと思いますが、50年代頃から使用され始めた殺虫剤という名の化学薬品の深刻な被害を書き綴ったものです。今回の創作実験劇場のテーマが「うたう」と聞いたとき、頭に浮かんだのがなぜかこの本にある鳥が歌を歌わない音のない春。あらためて読み返すと、まえがきの前ページにキーツの「湖水のすがは枯れはて、鳥は歌わぬ。」の詩を見つけ、作品名を「歌わない鳥」と決めました。さて、何を踊るのか。沈黙の春を読んでいると、まるで明日にでも地球上の全生命が奪い去られてしまうような気になりますが、これが書かれたのは1962年。すでに50年経ちましたが、今も私たちはここに生きています。数多のいのちを脅かすものをかいくぐり、何とかして、なんとしても生き抜こうとするいのちの力強さ。それがあつたからこそ、いのちがつながれてきた。そうだ、これを踊りたいと思いました。萩原、仲間、西田、平岡、谷岡の熱気いっぱい若手メンバー5人と一緒に踊りを創り上げていくのは、まさにいのちの力強さを実感します。自分の空をどうにかしてつかみ取ろうとする鳥たちをどうぞご覧下さい。

一番すきな歌 別れの歌 菊本千永

「先生、天女様は何の歌を歌ってはるんですか?」「そりゃあ、一番すきな歌を歌ってはるんや」とある小説の私の好きな一場面。法隆寺の吉祥天女像を前にした、小学生と先生の会話です。米軍機の墜落事故でやけどを負って全身を包帯で巻かれた苦しい息の下で「はとぼっぼ」を歌って亡くなった男の子。死の間際、男の子の前に天女が現れて「はとぼっぼ」を一緒に歌ってくれて・・・この事件を思い出すたびにそんなことを想像していました。あくまでもきれいな顔のままでした。この事件をたまたまとりあげた新聞を読む機会がありました。掲載されていた写真には全身を包帯で巻かれて万歳のかたちをした男の子。そして、新聞と私の間には、生まれてすぐの自分の子供が、その男の子と全く同じ万歳の姿で眠っていました。「この男の子は私の子供だ」一瞬自分が地獄に突き落とされたような感覚がありました。この男の子のお母さんは、男の子が亡くなった時自分も意識不明の状態でしたが、そばにいていたら、一緒に「はとぼっぼ」を歌ったことと思います。血を吐くような思いで。私の想像の中の天女も、きれいな顔ではなく血を吐くような顔で歌うようになりました。

ハスミ 風になって 藤田佳代

ハスミちゃんの踊りのうまさをつたえて下さい。さらに子役の幼木たちがピチピチワヤワヤと踊ります。これもみもものです。命が輝いて直接心に届きます。

涙砂の声 向井華奈子

あの原爆地広島で聞いたと同じ重い重い哀切の声よ
生きものは死んで土へ還る という もとをたどれば私たちが人間もひとつの砂だったかもしれない
この世を去ったものが生きてる私たちに残したメッセージが砂から聞こえてくるような気がして...
坂村 真民「涙砂」より 決して忘れてはいけないこと 私たちの中に留めておくべき声がある

山人 谷岡亮

昨年初めて自分の出品させて頂いたが、今年もまた出品させて頂けることになった。題名は『山人(やまびとと読みます)』ある獺師と狐の攻防を描いた(ように見えれば幸いである)ものだ。去年の11月頃から製作は始まり、佳代先生にはかなり手伝って頂いた。年が明けてからは、狩猟についてのエッセイを読んで理解を深めた。「獺師はやはりケモノを敬愛している(中略)そして両者の情愛はいつだって狩る側が狩られる側、どちらかの死をもって完結する。そこには他者の入り込む余地はない」(服部 文祥『獺師サバイバル』より抜粋)。スーパーに行けばいつでも肉が手に入り、「命のやりとり」を感じることが難しくなった。今、人間が太古から続けてきた生き残るための営み、それは狩る側と狩られる側が対等に闘いあう関係、第三者の介入は許されず、己の存在をかけて互いが闘む「命のやり取り」を考えてみてはどうだろう。

うたう 藤田佳代

- 1 これやこの いくも帰るも 分かれては 知るも知らずもあふ坂の関
十字路の真ん中で どの道を行けばいいの か 考えあぐねている
- 2 ひとはいさ 心も知らず ふるさは 花ぞ昔の香に にほひける
歌われた年から約千年たって ひとの様子はともも変わった。でもひととはやはり人間で実はなににも変わっていない。
- 3 高砂の尾の上の桜 咲きにけり 外山の霞 たたずもあらなむ
霧たつな と願えば 逆に霧がでて 向こうの山の桜が見えなくなってしまった。と うつむけば なにやら白いものが 桜のはなびら1枚を足元に運んできた
- 4 ほととぎす なきつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる
昼間は 胸を張って 頭をあげて 自信ありげに生きているけれど 夜は 震えながら ねじれながら 唇噛んで耐えている 知っているのは 月ばかり
- 5 嵐吹く 三室の山のもみじ葉は 竜田の川の錦なりけり
ワァー イェー ともみじ葉たちは川下り
- 6 世の中よ道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも鹿ぞなくなる
鹿が鳴いているのならシカの道があるに違いない それならわたしもわたしの思うように歩いていこう 自分で道をつけながら

活動報告

10回 藤田佳代作品展 2009年11月3日 神戸文化ホール

終焉 そして創生 山本忠勝 splitterecho

そのダンスのタイトルには少し寂しい響きがあった。

「日は はや 暮れ。」 とりわけ藤田佳代が振り付けた舞台であれば...(2009.11.3 神戸文化ホール)。

藤田佳代の最後のリサイタルで上演された新作である。彼女は舞踊人生の半生をかけて十回のリサイタルを成し遂げようと心に誓った。三年の熟成期間を設けて、その間にかなり規模の作品を二つ、三つとまとめあげ、つまり三年ごとに新しい作品を数作ずつ発表しながら、それを三十年間にわたって続けるという大きな計画だったのだ。そして今年がとうとうその十回目の年になった。

寂しい心が動くのは、タイトルの言葉がリサイタルの全計画の完遂、すなわち終焉と強く響き合うからだ。だが、夕暮れはなにも寂寥感だけでは終わらない。神々の黄昏(ワーグナー)はむしろ最も動的な音楽としてわたしたちの耳に響き渡っているのではないか。世界の巨大な炎上と創生への予感...

藤田佳代の暮れゆ(時間)もそのように壮大な景色であった。重厚なダンスがひとときの感傷を圧倒的に破碎して、力強い希望なダンスを生んだ。滔々(とうとう)たる流れがあった。舞台の左端から右端へ向かって果てしない群舞が続く。右(上手)に消えたダンサーたちは、舞台裏を全速力で駆け抜けて、ふたたび左(下手)から出てくることになるのだが、わたしたちの目には、永遠に続くかと思う群舞の連鎖が現われた。ゆっくりと傾き、ゆっくりと屈み、ゆっくりと伸び、まるで彫像のように鋭いシルエットを築きながら悠然と進んでいくダンサーたち...

思えば、河もこういふうに流れていく。海流もこういふうに流れていく。大気もこういふうに流れていく。

星々もこういふうに流れていく。時もこういふうに流れていく。人も...

そして、その無限の流れに全身のあらゆる感覚を浸しながら、なにものかがこれもまたゆっくりと進んでく。そのなにものかは、流れとは逆の方向へ歩むのだが、それはどうやら流れに抗って遡上するとか、流れに敢然と対決するとか、流れを強引に押し分けるとか、そのような闘いの身構えとはいささか異なるようである。むしろ流れがそのものの体のなかを通過する。そのものは流れを受け止め、流れに加わり、やがて別れ、そして流れが去っていくのにまかせなのだ。

むしろわたしたちは、そのなにものかがソロを踊る藤田佳代であることを知っている。

いっぽう流れのなかに現われたそのものが、すでに藤田佳代ではないこともわたしたちにはとうにわかっているのである。

そのものは名前を超えて現われた。超越して、なにものかになって、その場所に立ったのだ。

真のダンサーとは、そう、このように超越するものごとである。

そのものは、河と出遭うものである。海と出遭うものである。大気と出遭うものである。

星と出遭うものである。時と出遭うものである。人と出遭うものである。永遠の流れと交錯する。

おっ、流れが揺らいだ。揺らいで、渦になっていく。激しい渦になっていく。すると第二のなにものかもまた忽然と現われた。

だが、それが渦から生まれたものなのか、外からそこへ来たものなのか、その出現の瞬間は見のがした。気づくと、そこにもう第二のそのものが立っていた。むしろわたしたちはそれがフランケンシュタインの東伸一矩であることを知っている。だが彼もまたそこへ名前を超越して現われた。なにものかになって現われた。

あらためて言おう。名前を超越するとは、もはや閉じられたものではないということだ。あらゆる方向へ開かれたものになるということだ。もはや直線上を一方へ通過していきものではないのである。おびただしいものたちが逆にその体を通していくということだ。

渦が二手に分かれて、二体のそのものが、それぞれの渦の中で屹立する。なんと壮大なイメージ...。猛火の中から目覚めてくる女神ブリュンヒルデのようである。超獣の血で朱に染まって神に近いものとなるジークフリートのようである。あるいは、混沌のなかに生まれ出るイザナミとイザナギ。大いなるものの誕生。時空そのものの新しい創生に直接にかかわるもの。だが真に結び合おうためには、厳粛な試練に耐えねばならない。流れはいまや引き離すものとなる。二体のそのものは、無限の流れの向こうとこちらに引き裂かれる。そうして近くにいたときよりもっと深く互いの存在を確かめる。むしろ内部から見つめ合う。あるいは、これこそ死かもれない。死とは見えないものを見ることだ。対象を宇宙と一体に見ることだ。宇宙を一気に果てまで見ることだ。じっさい、最後の大きな渦巻きは葬送の炎ではなかったか。そして静けさ。あれはまさしく終末のあとの完璧な虚空のようではなかったか。神々の死...?だが思い到らう。神々の死とは実はよりいっそう大きな創造への契機であるということに。不死の神の宿命。それは新たな世界を築くためにまた甦ることである。そして二体のそのものが、ついにいま、ゆっくりと互いに向かつて歩みはじめた。幕がこれもゆっくりと降り始める。そう、新しい世界が生まれはじめた。

第10回藤田佳代作品展が行われ、藤田作の『運ぶ』『日ははや暮れ』『ひびく』が上演された。『運ぶ』は今年の三月に初演したものの改訂再演だ。藤田が中央に立つ。舞台の幕が開く。そして何かを運ぶ動作を繰り返すソロとなる。寺井美津子、金沢景子、菊本千永、かじのり子、向井華奈子が次々と登場し、やはり同様の動作を続ける。藤田は公演パンフレットに「すべての生き物は過去から未来へ命を託され運んでいる」と書いているが、その発想で舞踊はできているのだ。彼女の舞踊は、けっして熱くならず、どこまでも思索を押し進めて行くというものであり、概して寡黙である。この作品でもよけいなことはいっさい言っていない。しかし全体の動きの状態をコントロールすることに関しては、緻密な計算を働かせる。見ていて興奮するものはないものの、後になってじわじわ効いてくるところが怖い。『日ははや暮れ』は新作だ。これもテーマは命である。背景のホリゾンに巨大な葉っぱらしきものがいくつも斜めに下がっている。赤く色づいているもの、青々としているもの、すでに茶色になっているものとさまざまだが、これも命を連想させる。ダンスは黒い衣装の藤田自身と白い衣装の東伸一矩とのデュエットに、グレイの衣装の八人の群舞がからむ形だ。東伸の役どころは「あの世からの使者」つまり死をもたらす者ということだろう。群舞を間にはさんでじわじわと間をつめ、もっとも接近したところで幕となる。これは自分の死という者を藤田がどのように考えているかを示したものだ。彼女にとって死はとつぜん訪れるものではないようだ。『ひびく』はきよねん三月の初演。群舞の役割を大きく取り、その中に自身を溶かし込んで行く。しかしテーマが自分の命であることには変わりなく、刻々変化する状況をよく考えたあげく、少ない動きによってそれを正確に描いたのだ。 山野博大(週刊オン ステージ新聞 2009年11月27日号)

11月29日(日) 第5回藤田佳代舞踊研究所西大和教室発表会 まほろばホール

三年に一度の西大和教室の発表会でした。子供たちが生き生きと踊りました。第1回目から出演してくれている、生徒さんが今年成人式を迎えました。

1月10日(日) 舞踊へのいざない 兵庫県難病団体連絡協議会主催 勤労会館

観て下さった方たちは皆、何かの病気を抱えている方たちでした。こちら生半可な気持ちでは踊れないと緊張していましたが、すごい熱意でもって観ていただいて、踊る側にとても心地の良い舞台でした。